

耳かきの話

兄王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

耳掃除するのだけの話し。ただそれだけ。

目次

耳かきの話

1

耳かきの話

耳が痒い。夜の11時大学寮のベッドで横になり明日に備えて寝ようとした矢先。突如現れた耳の痒みにうなされ私は眠れずにいた。

一応指で耳をほじくってみるが効果はなし。寧ろこのもどかしい感じが不快感を与え痒みが増す一方だ。

「やつぱり、耳かきで掻いた方がいいか……」

とうとう我慢できなくなった私はベッドから起き上がり机に置いてある愛用の耳かきに手を伸ばした。私は耳掃除が大好きで粘着、黒、ベビー綿棒や金属、プラスチック、竹の耳かきなどいろいろと試してみたがどれも私の性分にあつた物ではなかった。綿棒は風呂上がりにも今でもよく使うが耳の奥を搔くには適さず。耳かきは力加減が難しく力量を誤り耳を痛める事があつた為、せいぜい耳の手前を搔く事程度にとどめていた。

しかしそんな中で出会つたのが現在の愛用品「みみごち」という耳かきだ。お値段500円と少々高めだがまさに私が探し求めていた一品であり予備を含めて三本も所持している。ヘッドが柔らかい極細ブラシになっており360度どの角度からも搔

く事が出来、それでいて痛くない。これ程素晴らしい物があつたとは……初めて出会った時は感動すら感じた。

そんな私の耳かき愛はさておき「みみごこち」に手を伸ばしてた私はあまりの痒さに今すぐに何でもいいから棒状の物で耳奥をガリガリと搔きたいという欲求に耐えながらペン型のキャップを外し耳かきを指でしっかりと摘み一気に奥に突っ込みたい気持ちを抑えゆつくりと耳の奥に入れる。

「おう……」

あまりの心地よさに思わず声が漏れる。柔らかいゴムのような素材で出来た先端は従来の耳かきなら搔くのが難しい耳の奥も痛みなく搔く事が出来る。しばらくの間、力の入れずこする程度に抑えゴソゴソとあたる感触を楽しんでいたが耳かきを摘んだ指に少し力を加え痒みの原因であろう側面部分を少し強めに搔く。

「うい……」

ああ……いい、最高だ……

ベッドの上で胡座をかきながら搔いていた私は痒みよって消えていた睡魔が一気に押し寄せ、耳かきの心地よさも相まっとうつらうつらと眠りに入りそうになる。しかしこのまま寝落ちに入るのはまずいので眠気を抑えながらゆつくりと耳かきを抜く。

「おお……」

ヘッドには粉状の耳かすが付着しており思わぬ収穫に満足する。恐らくこれが痒みの原因だったのだろう。実際、あれ程もどかしかつた痒みはすっかり消えており不快感もない。付着した耳かすはあらかじめ用意しておいたティッシュの上でポンポンとはたき落とす。

大満足の結果になった私は押し寄せる眠気に我慢出来ず耳かきを机に戻さずどうせ朝に片付ければいいと思ひ耳かすを落としたりティッシュを丸め耳かきと一緒にズボンのポケットにしまい横になり布団を被りそのままゆっくりと深い眠りに入った。